

大雪山国立公園の保護と活用

－トイレだけが問題ではない－

今村朋信（北海道自然保護協会会員・えぞ山岳会会員）

わたしは今年八十歳になる。積極的登山からはすでに遠退き、現在は山歩きを楽しんでいるに過ぎない。そんなわたしが今更提言と言うのもおこがましいことだが、1950年代から大雪山のトイレ設置について再三に渡り北海道と話し合ったことがあるし、70年代には大雪山の登山者から入山料を徴収し、大雪山の保護と活用に当てるべきだと主張したことがある。そのことを覚えていた方がおられたのか、今回執筆依頼があった。

第10回 山のトイレを考えるフォーラムの資料集を読むと、わたしの述べることなど先刻承知しておられることのようにあるが、改めて叩き台として再提言することも意味あることかと筆を取ることにした。

なお、地域は大雪山に限定して述べる。他の山は地形、環境も異なるので、別個に対策を講じられるべきと考える。

大雪山はご承知のとおり上部は山と言うより高原地形で、広大な花畑が大地をおおっている。その中を心を解き放って縦横無尽に歩き回るのがわたしには魅力であった。好きなところでテントを張り、流れの水は躊躇することなく飲んだ。熊は見通しの利くところでウンコをする。わたしもそうであった。大景観を目の前に用を足す爽快感は今も忘れ難い。

現在はそうした喜びが一切禁じられている。それで現状はどうなっているか。ここより歩いては駄目、と言う道は三、四十糎の樋状の溝地となり、雨が降ると川となり、両側は削られて植物の根毛が垂れ下がっている。トイレの無い場所では、ウンコは多く指定キャンプサイトや小屋の周辺に堆積していて、その当時、特に白雲岳避難小屋の周辺の植物はそのために異常に生長し、カメラを花に近づけるとアンモニア臭で息がつまり、眼に刺激を受けた。あまりにひどいので、小屋の前の石垣の周りのウンコだけでもと集めて埋めたが、翌朝元の木阿彌になっていた。熊を恐れる人達が手っ取り早く用を済ませたのであろう。

こうした実情を北海道に話し、トイレの設置、コースの変更を求めたのである。が、分かりました、支庁に伝えました、との返答はあったが、自然の景観に異質感を与える建築物は駄目、花畑の踏み荒らしは認められない、と言うこともあったが、実情は金が無い、と言う一事に盡きていたようである。

そこでわたしは、入山料の徴収を自治体で条例を設けて行うべきだと主張したのである。

08年の登山届からの集計によると入山者は約七万人である。入山料を日数で徴収すると

軽く十万人分を超えるであろう。それを基金として行うことを考える。

<コースについて>

大雪山高原台地の特性を活かした設定をする。

まず、既存のコースは岩石を投入して埋め戻す。新たなコースはA点からB点まで三十分から一時間くらい余計かかるかもしれないが迂回させる。三年使用したら他にコースを移動させる。三本くらい設定して順繰りさせるのである。踏みつけられた植生は三年から五年経ったら70パーセント以上回復する

新設コースは原生の花畑の中に踏み込むことになり、景観も今までと異なった展望を目にすることになり、新鮮な驚きに心躍るはずである。

指導標はもちろん立てる。また、入山料徴収員、誘導員を配置し、混乱が生じないようにする。それらの人たちはもちろん有給とし、基金から支払う。いたずらにボランティアに頼るべきではない。

<トイレについて>

自然の地物、例えば岩石などを外観に配し景観に溶け込ませる。尿尿タンクはレールで外に引き出せるようにし、ヘリコプターで吊り下げる。ちょっと話は逸れるが窓は大きくして用を足しながら外観の展望に心を遊ばせるようにしたい。もちろんこれらの費用は基金で充当する。

こうしたことによりキャンプ場の変更もあり得るが、何年かごとに新鮮な景観と出会え、大雪山の広大さを改めて肌で知る感動は何ものにも代え難い喜びを訪う人に与えてくれるはずである。

基本的考えは以上である。具体化するときはもっと細かな検討を要しようが、大雪山だけに絞って言えば、トイレ問題解決のためだけに入山料を求めることは、大雪山を訪う人に真に応えることにはならないと思う。大雪山の保護と活用を併せて考え、今後は入山料徴収の道条例設定にも力点を置く必要があるだろう。

ネパールヒマラヤのトイレ事情

ヒマラヤのトイレ事情と比較して、との話もあったので、山岳帯の現状について見聞を伝える。

登山は近年下火になったが、エベレストを始めトレッキング許可で登れる山は、申請し登山料さえ払えば全部受理されるので、キャンプサイトはテントの張り場所がないほど混雑している。一時期、排泄物は持ち下げようと提唱があったが、下げても受け取る機関も

処理する施設もないとあって、今は穴を掘り埋め戻して終っている。同行のシェルパ、ポーターは従来どおり周辺で済ますので臭気が漂っている。

トレッキングコースの実情はどうか。

王制が廃止されたが、政党の協調が整わず世情は混沌としているが、ヒマラヤを軸にネパールは観光立国として立たない限り成り立たないと言う認識は強く、エベレスト、ランタン、アンナプルナヒマールの山域は宿泊施設、食堂、道路などの整備が進み、トレッカー、ポーター、荷運びの牛馬で往来の絶えない賑いである。トイレはそれらの施設に一応備えられているが、地下滲透、河川への放流、枯葉を混入させ堆肥にしているのが処理の実態である。だが、それらのある集落と集落の間にはかなりの距離があり、無人帯となることもあって、道路のそばの樹林、岩石帯に踏み込むと排泄物が山をなしている。

わたしはこの二十年間で二十三回トレッキングに出かけた。わたしの遊び方は、地図を開いて氷河のある谷を見つけ出して入域し、四、五千米台の山に登ったり、氷河の谷を縦横に歩き回るのであるが、先に挙げた三大トレッキングルートと異なり、他のパーティとは先ず会うことはなかった。どこでも用を足せる環境ではあったが、スタッフはテントを張れば必ず穴を掘りトイレテントを建ててくれた。だが、使うのはわたしたちサーダーだけで、ガイドもポーターもみな四方へ散って用を済ませていた。わたしたちも行動中は大地にそのまま放出したが、石をかぶせるなどして露出しないように心がけた。

ネパールヒマラヤの森林限界は四千米前後で、限界より上部では、どこの谷でも大方五千米前半まで茅草類が生育している。雨期（五月末から九月前半まで）にはその草類を目当に山麓の人たちが山羊や牛などの家畜を追い上げて放牧し、搾乳してチーズなどを作っている。わたしが先ず人に会わないと言ったのは、一般のトレッカーが来ないこともあるが、乾期（九月末から五月前半まで）には家畜を山から下ろすため、残っているのはおびただしい家畜の糞だけである。だが、よく見れば、前年以上の物はその痕跡を残しながらも分解し大地に還っていた。

元々ネパールの人たちの糞尿に対する思想は、野外にすることで、それは太陽に浄められ、風雨に晒されて大地に還る物、と言う認識であるから、野外ですること何の抵抗もないのである。氷河の谷ではそれが実証されていた。

糞害は狭域に多くの人々が集中することで発生するのだが、観光立国としてネパールがこの問題に今後どう対処するか大変大きな課題となる。が、当分はどうしようもなく野放しが続くのであろう。

氷河の谷は、そうした諸々を抱えた静寂の世界で、どこでも歩ける自由があった。自分の力働に応じ、氷河を尋ね登り歩いたが、心はやはり初心に帰り、大雪山の広大な花畑の闊歩を想うのであった。